

# スターティウス『テーバイス』の世界

山 田 哲 子

## I 先行作品との比較の意義

ローマ帝政期、ドミティアヌス帝の治世。「白銀時代」のラテン詩人スターティウスの手による叙事詩『テーバイス』は、有名なギリシャ神話であるオイディプスの家の破滅を主題としている。その神話はおおむね次のような内容である。

コリントスの王子オイディプス。彼は「母と同衾し父を殺害する」という神託を受ける。この恐ろしい未来を回避するために、それまで慈しみ育ててくれた両親と故郷から永遠に離れる決意をする。そして女面獣身有翼の怪物スピュクスを退治し、その功績によりテーバイの王となり、前の王の后を娶る。しかし、時が過ぎ子も生れたあとになってから、自分がコリントスの王子ではなく、ここテーバイの生れであったこと、赤子の時に同じ予言をされた両親の手によって抹殺されているはずであったこと、かつて旅の途上で行き掛かり上殺してしまった男が実は父ラーイオスであったこと、自分の「妻」となっている女はまぎれもなく自分を生んだ母親であることを発見する。オイディプスは我が身を呪い、自らの手で眼球を抉り出す。

呪いは、近親相姦の結実である息子たちにも及ぶ。ポリュネイケースとエテオクレースの兄弟は、テーバイの王位を巡って骨肉の争いを繰り広げる。スターティウスの作品は、特にこの二人の争いを中心に構成されている。ポリュネイケース——この名は「争い多い男」の意味を持つ——は祖国を追われ、アルゴス王アドラーストスの娘を娶り、その国の軍隊を率いて祖国に攻め寄せる。テーバイは「七つの門を持つ都」の異名を持つ。その門の数に合わせて、アルゴスの七人の戦士が選ばれる。熾烈な戦いの顛末は、オイディプスの呪われた息子たちが互いの手で互いの命を奪うことで終わる。

この血で血を洗う家族の物語は、スターティウス以前にも繰り返し作品化されている。古くは「叙事詩圈」と呼ばれる作品群の中に『オイディポデア』『テーバイス』があったが、現在は失われており、わずかな断片が伝わるのみである。

他にも、ホメロスの叙事詩やピンダロスの祝勝歌などの中にも言及があるが<sup>1)</sup>、これらはすべて短く暗示的なものである。また近年になってから、ステーシコロス作と推定されるパピルスが発見されているが、これも全体のごく一部分にすぎない<sup>2)</sup>。

前5世紀アテナイでは、この主題を用いた悲劇作品が多く作られた。現在残っているものでは、まずアイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』（紀元前467年に上演）、それから有名なソポクレースの『オイディプース王』（上演年代不明）と『アンティゴネー』（前441年上演）、そしてエウリーピデースの『ヒケティデス』（上演年代不明。前424～422年の間と推定）、『ポイニッサイ』（推定、前409年）である。またソポクレースの作だが彼の死後に孫によって上演された『コロノスのオイディプース』（前401年上演）がある。この他にも同じ主題を用いた悲劇作品は多数作られたことがわかっているが、今は断片しか残されていない。

その他にも前4世紀にはアンティマコス作の『テーバイス』という叙事詩があり、スターティウスの作品はこれに負うところが大きいとも考えられているが、これもまた断片しか残されておらず、真偽の程は不明である<sup>3)</sup>。

下ってローマの時代になると、セネカが『オイディプース』および『ポイニッサイ』という悲劇を作っている。ただし後者は作品の一部分しか伝わっていない。

さてスターティウスの叙事詩は、これらの「先行作品」を読者がよく知っていることが前提とされている。「術学的」のそしりを受ける所以である<sup>4)</sup>が、これは、一人スターティウスの癖というわけではなく、ラテン詩全般、特に「白銀時代」に共通する特徴でもある。

具体例を一つだけ挙げれば、オイディプースの述懐の中に「ポーキスの三叉路で年老いた王を殺した」という一文がある（1.64-66）が、ここで殺されたのが誰であるか、わざわざ名を上げなくともラーイオスであることを読者は当然理解できるものとみなされている。ソポクレースの

『オイディプース王』において、この三叉路でラーイオス王が殺されたということを耳にした瞬間、オイディプースははじめて自分の存在に疑いを抱き始める（726-730）。冒頭の威厳と自信に満ちた姿から幕切れの無残な有様に転落する分岐点である。その場所で道争いの末に一人の老人を殺害した記憶が彼にはあり、やがてそれは前のテーバイ王であり自身の父親であるラーイオスであったことが判明する。ギリシャ悲劇を知る者であれば、「ボーキスの三叉路」という言葉を聞けばすぐさま、そこで尊属殺人の血が流されたこと、その血がやがて復讐を求めてテーバイに疫病をもたらし、ついにはオイディプースの破滅をもたらすのだということを想起するのである。

このような例は枚挙に暇がない。ことに地名や人名・神名は、そのままの名で呼ばれる事の方が稀であろう。したがって現代の読者にとっても、『テーバイス』を理解するためには先行作品の知識は不可欠となる。

しかし、先行作品の中には多くの差異が存在している。例えば、この呪われた家族が身を滅ぼす順番は作品によって異なっている。『オイディプース王』では、王妃イオカステは、現在の夫が実はかつて殺したはずの我が子であったことを知るとすぐさま（このことがオイディプース自身に知られるより先に）自ら首を縊って死ぬ。一方『アンティゴネー』では、まずオイディプースが目を潰して死に、次にイオカステが首を縊って死に、それから二人の兄弟が刺し違えて死んだ、と述べられている。これに対して『ポイニッサイ』では、まず二人の兄弟が決闘で両方とも死に、これを見てイオカステは息子たちの命を奪った剣で自害し、オイディプースは最後まで生き残るのである。

その他にも様々な相違やバリエーションがある。例えば、テーバイを攻める七人の將軍の顔触れには多少の変動がある<sup>5)</sup>、七つの門の名前にも相違が見られる<sup>6)</sup>。

しかし、その中でも特に根本的な問題であり、しかもスターティウスの作品にも関わる重要な相違と言えは、「ポリュネイケース・エテオクレース兄弟の争いはどのようにして始まったのか」という点についてである。上述したように、『テーバイス』はこの兄弟の争いを主題としている。したがって、この問題は叙事詩全体の「発端」と呼んでよい。しかし、この重要な点に関してスターティウスは極めて曖昧な説明しか行っていないのである。

このように見てくれば、先行作品を検討することの意義は明らかであろう。先行作品のどの要素をスターティウスが取り入れたかを調べることによって、まず『テーバイス』の不明瞭な部分を解明することができる。それと同時に、何をどのように取り入れたかを考察することを通じて、スターティウスの詩の特徴というものが見えてくることも期待できるだろう。

そこで次章では、ポリュネイケース・エテオクレース兄弟の争いを扱った諸作品を比較検討し、彼らの争いの発端がどのようなものとして描かれているか、その相違を明らかにすることにしよう。比較の対象は、断片ではなくまとまった形で残っているギリシャ悲劇の諸作品、『テーバイを攻める七人の将軍』『アンティゴネー』『ヒケティデス』『ポイニッサイ』『コロノスのオイディプース』の五作品とする<sup>7)</sup>。

## II ギリシャ悲劇における諸作品の比較

### 1. アISKYLOS『テーバイを攻める七人の将軍』（以下『七将』と略）

舞台は、ポリュネイケースが率いるアルゴス軍が既にテーバイの城壁の下にまで迫ってきているところからはじまる。冒頭、エテオクレースは、責任感あるポリスの指導者として姿を現す。まず自らの立場を船の舵取りになぞらえ、市民たちに対しては祖国を守るようにと鼓舞し、神々に対してはその加護を祈願する(1-35)。ここでのエテオクレースは、共同体や先祖伝来の祭祀を守るという義務や責任の観念をしっかりと持っていることがわかる。

一方、ポリュネイケースの側は、味方であるはずの予言者アムピアラオスから、祖国を攻める行為の不当性を厳しく非難されている(580-3)。

このように見ると、エテオクレースは正当な支配者でありポリュネイケースは不当にもその支配権を篡奪しに来ているかのような印象を受けるかもしれない。しかし、作品全体を考えると、このような単純な分け方だけでは説明のつかないこともある。

ポリュネイケース自身は、盾に「正義」の紋章をつけ、自分の本来の権利を回復することを主張している(634-648)。この言葉を信頼するな

らば、ポリュネイケースは、エテオクレースによって不当にも祖国から追放され、本来の権利を奪われたということになる。そうすると、兄弟を追い出して王位を独占したのはエテオクレースの方ということになり、加害者と被害者の位置関係は逆転してしまう。

しかしこの重要な点に関しては、ほとんど何の説明も行なわれていない。ポリュネイケースが何故エテオクレースに対して戦いを挑むのか、この理由に関しては、「父オイディプースの呪い」であるとか、「生まれながらの悪党だから」といった類いの説明しかなされていない<sup>1)</sup>。したがってこの作品においては、兄弟同士の争いの発端については不明であり、どちらが加害者であるかも不明のままである。

とはいえ、この作品の中では、「祖国に対する責任感あふれるエテオクレース」という像と、「祖国を攻め滅ぼそうとするポリュネイケース」という像と、「正義の名の下に、自分の権利を回復しようとするポリュネイケース」という像とが（少なくとも、作品の一部においては）呈示されている、ということに留意しておきたい。

## 2. ソボクレース『アンティゴネー』

この作品では、エテオクレース・ポリュネイケース兄弟の争いが終結した時点から始まる。したがって、その発端についてはほとんど問題にされていない。兄弟の争いが両者の相打ちという結果に終わった後、新たな支配者となったクレオーンは、祖国に対して戦いを挑んだポリュネイケースを、国家の敵であるという理由でその遺体の埋葬を禁じる。ここでは、ポリュネイケース＝祖国の敵、エテオクレース＝祖国の守護者という対照的な像が明確に示されている（194-206）<sup>2)</sup>。

この禁令に対して兄弟の妹アンティゴネーは、肉親の遺体を埋葬することは国の法律よりも重要な義務であるとして公然と反抗する。しかし、このアンティゴネーの口からは、ポリュネイケースの行為（テバイに攻め寄せたこと）そのものに対する弁護は聞かれない。彼女が、国王の決定に反してでも兄の遺体を埋葬しようとしたのは、兄の行為に情状酌量の余地があると思ってのことではなさそうである。彼女にとっては、ポリュネイケースが自分の兄である、という事実のみが重要なのであって、彼が何をしたか、ということは問題にされていないようである<sup>3)</sup>。

またクレオンも、ポリュネイケースの行為を非難はするものの、彼が何故そのような事をしたのか、という理由については言及していない。クレオンにしてみれば、いかなる理由があろうとも、テーバイを攻め滅ぼそうとする行為そのものがゆるしがたいことなのであろう。したがって、この作品においては、エテオクレース・ポリュネイケース兄弟の争いの動機や発端については問題にされておらず、それぞれ「祖国を守って戦死した者」「祖国を攻め滅ぼそうとした者」という像としてのみ呈示されている、と考えてよさそうである。

### 3. エウリーピデース『ヒケティデス』

この作品もまた、エテオクレース・ポリュネイケース兄弟の死の後に始まる。作品中、生き残ったアルゴスの王アドラーストスがテーバイ攻めの発端について簡単に説明している箇所がある。それによると、ポリュネイケースはもともと、予言された破滅（はっきりとは書かれていないが、兄弟同士が争って二人とも死ぬということであろう）を回避するために、自らの意思でテーバイを離れたのにもかかわらず、その善意を利用したエテオクレースによって権利（財産）を侵害されてしまった、というのである（149-154）<sup>4)</sup>。

ここに呈示されているポリュネイケースは、もともとは祖国や兄弟の身の安全のために自分の身を引くことのできる人物であり、テーバイに攻め寄せてきたのも、あくまでも権利の回復のためであった、というものである。むしろ、エテオクレースの方が貪欲な人物として呈示されているのである。もちろんこれは、アルゴスの王アドラーストスによって呈示されている像であって、テーバイ側とはまた異なった見方に基づいているかもしれない。しかし、『七将』の冒頭で呈示されたようなエテオクレース・ポリュネイケース像とは全く異なる像が存在し得る、ということには注意しておく必要があるだろう。

### 4. エウリーピデース『ポイニッサイ』

この作品では、イオカステのプロロゴスによって、エテオクレース・ポリュネイケース兄弟の争いの発端からの経過が明らかにされている。心を狂わせたオイディプースのかけた呪い（息子たちが互いに殺し合うようにという）を回避するべく、兄弟は合意の上で、テーバイの支配

権を一年ごとに交替すること（そして、支配権を持たない方は、その間テーパーバイを離れていること）を取り決める。先に、年長のエテオクレースが支配し、年少のポリュネイケースは自発的に祖国を離れる（69-74）<sup>5)</sup>。しかし、一年の期限が過ぎてもエテオクレースが支配権を弟に譲ろうとしなかったため（74-76および481-483）、権利を回復するべくポリュネイケースはテーパーバイに宣戦布告する。

舞台は、アイスキュロスの『七将』と同様、アルゴス軍がテーパーバイの城壁近くまで迫ってきた所から始まる。が、『七将』と異なり、このポリュネイケースは、すぐにテーパーバイを根こそぎ滅ぼそうとはしない。母親イオカステの仲立ちによって、エテオクレースと話し合いによる解決を図ろうとするのである。

ここで呈示されているポリュネイケース像は、その名（「争い多い男」の意味）に反して、可能な限り兄弟との争いを回避しようとする善意の人間である。異国の軍隊を率いてはいても「戦いは自分の本意ではない」と言い（433-434）、「自分の権利が回復されさえすれば軍隊を引き上げる用意がある」と断言し（484-485）、さらには「自分の権利である一年間が過ぎたなら、再び支配権をエテオクレースに返すつもりだ」とまで言うのである（487）。（その後一年たった時に、エテオクレースが再び王位を独占するという事態を想定していないのだろうか。）

これに対してエテオクレースの方は、「独裁権力を手に入れるためには、いかなる代価も惜しまない」（504-506）、「この大切なものを他人の手に渡すことなどしたくない」（507-508）と豪語して権力欲と独占欲をむきだしにするような男として描かれている。これは、『七将』のエテオクレース像とはかけ離れた像である。兄弟を追放して王権を独占し、話し合いに応じようとししない、無法な独裁者である。

つまり、この作品におけるポリュネイケースの位置付けは、「祖国に対して戦いを挑む」という汚点は拭いされないものの）あくまで「被害者」なのである。彼は、不当に権利を侵害され、祖国からも家族からも引き離されてしまった不幸な男として呈示される。特に、「祖国から追放された者」としての精神的・实际的苦痛については、母親との会話や彼自身の台詞などによって詳細に描写されている（366-370）。このためと、エテオクレースの貪欲で卑劣な像との対比によって、ポリュネイケースは共感と同情を誘う像となっているのである。

## 5. ソポクレス『コロノスのオイディプース』(以下『コロノス』と略)

この作品では、エテオクレスは全く悪辣な人物像として呈示される。エテオクレスは、『ポイニッサイ』とは逆に)年少の弟であったにもかかわらず、兄であるポリュネイケースを追放してテーバイの支配権を我物としたのである(1291-1307)<sup>6)</sup>。王権を分け合うとか、話し合いによって協議解決する、という発想は存在する余地も無い、実に直截的なやり方である。しかも、すでに王位についていた兄を追い出してのことであるからこれはまごうかたなき王位篡奪である。

この『コロノス』においては、本来テーバイの支配権を持っていたのはポリュネイケースの側であり、エテオクレスの方がこれを奪い取ったのであるから、ここでのポリュネイケースは、一方的にやられっぱなしの被害者である。

さらに、ポリュネイケースがテーバイを離れたのははじめから自分の意志に反してのことであった、ということにも注意する必要があるだろう(上述したように『ヒケティデス』『ポイニッサイ』では、はじめは自分からすすんでテーバイを離れたのだ、ということが強調されている)。

## 6. ギリシャ悲劇作品を比較した結論

このように見てくると、先行作品の中には、「祖国を攻め滅ぼそうとする(加害者である)ポリュネイケース」と「不当にも祖国から追放された(被害者である)ポリュネイケース」という、全く正反対の二つの像が存在することがわかる。また、同じ被害者の場合でも、「自発的にテーバイを離れるポリュネイケース」と「力づくで追い出されるポリュネイケース」の二様のケースがあることにも注目する必要があるだろう。

同様にエテオクレスにも、「祖国の守護者としてのエテオクレス」と「兄弟を追い出して王位を篡奪したエテオクレス」という正反対の像が存在している。つまり、同じ名前の人物であっても、作品によって全く異なる描き方がされているわけで、これらすべてを一つの作品の中に共存させることは不可能のはずである。

それでは、スターティウスは、この二人の兄弟を、どんな像として描いているのだろうか。このことを、特に加害者・被害者関係に注目し



て、次の章で具体的に検討してみよう。

### Ⅲ スターティウスの『テーバイス』の場合

まず、オイディプスの呪いの結果、二人の兄弟は、互いの存在に憎悪と妬みを感じるようになり、一年交替で、一方が王国を支配し、もう一方はその間国外に退去することを取り決める。そして、籤引きの結果、ポリュネイケースの方が先にテーバイを離れることになる(1.123-168)<sup>1)</sup>。

ここで出てくる「一年交替の支配」は『ポイニッサイ』にあるものだが、そちらではオイディプスの呪い(兄弟同士が王権を巡って争うようにという)の成就を回避する手段として取られていた。つまり『ポイニッサイ』では、少なくとも「一年交替」を取り決めた時点ではまだ「兄弟同士の争い」は生じておらず、むしろそのような事態を避けようという努力さえ行なわれていたのである。これは『ヒケティデス』でも同様である<sup>2)</sup>。

これに対して『テーバイス』の場合には、呪いを回避しようとするどころか、その効果は直ちにあらわれ、兄弟同士の間に憎悪と嫉妬が生れている。彼らが支配権を交替するのは、衝突を回避するのが目的ではない。逆に、相手に独占されないためであり、常に一年後の交替が迫って相手を脅かすことができるように、という悪意から生じた取決めなのである(1.140-141)。

また、『ポイニッサイ』では、エテオクレースの方が年長であるためにポリュネイケースが自発的にテーバイを離れたのに対し、『テーバイス』では、二人のうちどちらが年長であるかの説明は無く、籤引きで公平に決められている。正確な状況は不明だが、「同じくびきにつながれているところから、この二人にはもともとどちらかに優先権があったのではなく、同等の権利を有していると考えるのが妥当であろう<sup>3)</sup>。

したがって『テーバイス』におけるポリュネイケースは、『コロノス』のように力づくでテーバイの王位を追われたわけではない。しかし、『ヒケティデス』『ポイニッサイ』のように、自発的に祖国を離れたわけでもない。『テーバイス』のポリュネイケースがテーバイを離れた

のは（合意の上とはいいいながらも）全く不本意なことであったのである。

続いて場面は神々の会議の場に変わる（1.197-311）。この会議でユピテルは、「ポリュネイケースがアルゴス王の娘を娶り、その国の軍隊を率いてテーバイへと攻め寄せる」ことを決定した、と宣言する（1.241-245）。この神の予言によって、ストーリー上は未来のことでありながら、実際に起こった事のような錯覚が読者に与えられることになる。しかも、「実際にそのとおりになった」ことを、他の先行作品によって読者はすでに知っている。このことも、錯覚を助長することになる。

またユピテルは、ラーイオス（オイディプースの父）の亡霊を通して、「亡命先を頼りアルゴスの援助に増長しているポリュネイケースをテーバイから締め出し、王権の交替を拒絶せよ」（1.299-301）と、エテオクレースに伝えるように、と命令する。ここでは、一見するとエテオクレースの方が、取決めに破って兄弟の権利を侵害し独占するように思われる。しかし、これは単純に独占欲にかられてのことだけではなく、「ポリュネイケースが武力で王位を奪還しにくる」と思えばこそその防衛措置なのである。

たしかに、ポリュネイケースはまだ「エテオクレースの支配権を奪い取る」とまでは明言されていない。単に、「亡命先を頼りとし、アルゴスの援助に増長している」と述べられているだけである。とはいえ「一年間の亡命の間にポリュネイケースはアルゴスでいい暮らしをしている」というだけでは、エテオクレースが王権の交替を拒む理由にはなりえない。ここの表現には、「王位奪還のための武力をすでに手中に収めて意気軒昂となっている」という意味が含まれていると見るべきである。このように考えると、「取決めに先に破るのはポリュネイケースの側だ」とユピテルは言っていることになる（このことは、後のラーイオスの亡霊の言葉の中では実際に明らかになっている）。

しかし、本当にポリュネイケースの方が先に取決めに破るとは、テキストではまだ語られていない。我々は、先行作品の中ですでに、「兄弟の権利を侵害して王位を篡奪しようとするポリュネイケース」という像を知っている。それゆえユピテルの言葉は事実である、と考えることもできる。一方、「自分の権利以上を求めないポリュネイケース」および

「ポリュネイケースの権利を侵害するエテオクレース」という像も知っている。こちらを想起する読者は、ユピテルの言葉を「事実を歪曲する企み」と考えるだろう。実際、叙事詩の伝統の中で神々は、自分の目的を達成するためには嘘も策略も弄することをためらわない<sup>4)</sup>。

場面は再び人間界に戻る (1.312-)。ポリュネイケースは、「その間、すでに長いこと追放者としてひとりさまよっている」と描写されている<sup>5)</sup>。とはいえ、一年間だけ祖国を離れていればよいだけの「追放者」にすぎない。「のろい足取りで巡っていく一年間の長さが終わらないのを嘆いている (315-316)」という表現から、この時点ではまだ籤引きの日から一年はたっていないことが確認できる。また、王位に対する欲望は非常に強いが、まだここでは一年交替の取決めを守るつもりでいることがわかる<sup>6)</sup>。

このあと、アルゴスに到着し (380-389)、アドラーストス王によって「アポローンに予言されていた娘婿」として迎え入れられる (482-510)。このことで、ユピテルの言葉どおりにストーリーが展開していくのがわかる。ただし、「ポリュネイケースがアルゴス王の娘と縁組する」ことを知っているのは、この時点では、神々を除けば、読者とアドラーストス王だけである。王は、乳母に命じて娘を宴席に來させ、ポリュネイケースに引き合わせている (1.529-539)。しかしこのことが何を意味するか、ポリュネイケース自身はまだ知らずにいる (縁組の話をもちかけられるのは、翌朝になってから、テキスト上では2巻152行になってからである)。

巻が変わり、場面は今度はテーバイのエテオクレースへと移行していく。初めは、1巻311行 (神々の会議が終了した時点) からの続きとなる。ユピテルの命を受けたメルクリウスが、冥府からラーイオスの亡霊を連れ出し、テーバイへと導いていく (2.1-70)。

この冒頭では「その間マイアの息子 (メルクリウス) は……」と述べられている (2.1)。この「その間」という言葉がいつの間を指すかは、厳密にはわからないが、1巻の380行でポリュネイケースがアルゴスに到着して以降は、まだその夜も明けていないのであるから、この同じ夜の間のいつか、ということになるだろう。すると、ポリュネイケースがアルゴスに到着したその晩に、テーバイではラーイオスの亡霊がエテオ

クレースの枕元に訪れた、ということになる。

ラーイオスの亡霊は、エテオクレースに対して、「ポリュネイケースはアルゴス王との縁組によって力を得て、エテオクレースから王権を奪い取り独占するつもりである」と告げる(2.102-119)。ここでははっきりと、ポリュネイケースの方が先に取決めを破って王位を奪おうとする、と述べられている。エテオクレースの立場からすれば、自分は被害者であって、加害者はポリュネイケースの方だ、ということになる。

「アルゴス王との縁組」そのものは(上述したように)すでに始まっている。つまり、ポリュネイケースにとってこの上もない後ろ盾となるアルゴスの力は、すでに約束されたも同然なのである。その上、ポリュネイケースが王権を我がものとすることを強く欲していることもすでに繰り返し語られている。したがって、亡霊の言葉は、決して嘘とは言えない。

しかも、ポリュネイケースがこの亡霊の言葉どおりアルゴス軍を率いてテーバイに攻めてくるということは、すべての先行作品に共通の要素でもある。したがって、これが実際に「これから」起こることを疑う読者はいないはずである。これらのことのために、ラーイオスの亡霊の言葉は、いよいよ真実味を増す。

だが、結果としては正しい予言であったとしても、その時点でポリュネイケースがそのように意図していたはずはないのである。すでに述べたように、アルゴスに到着する直前での描写は(王権を欲しているとはいっても)一年交替の取決めを破ったり王権を独占しようとまでは考えてはいなかった。そして、ポリュネイケース自身は自分がアルゴス王の娘婿となることをまだ知らないのだから、彼の気持ちに変化する理由はどこにもない。したがって、少なくともこの時点では、ポリュネイケースが「アルゴスの力を頼んでテーバイに攻め寄せよう」という考えを抱くはずがないのである。

しかし、真実がどうであれ、エテオクレースは亡霊の言葉を信じる。そして、恐怖と怒りにかられ、次いで、兄弟に対する戦いの準備をする(2.125-133)。ここで見られる「王位を追われる不安に怯えるエテオクレース」という像は、これまでの先行作品には存在していない<sup>7)</sup>。

また、ここで重要な事は、エテオクレースが王位を独占しようと思ったのは、この恐怖の晩であるということである。つまり、彼ははじめか

ら兄弟の権利を侵害し独り占めしようと思っていたわけではないことになる。例えば『コロノス』のエテオクレースのように、はじめから王位を（自分に権利がないにもかかわらず）奪い取ろうとしたわけではない。あくまでも、相手が攻めて来るので防御しているにすぎないのである。この「被害者としてのエテオクレース」という像は重要である。

場面はまたアルゴスに戻る（2.134-）。一夜明け、アドラーストスは正式に、娘との縁組をポリュネイケースに申し出る<sup>8)</sup>。これに対してポリュネイケースは、（最終的にはもちろん承知するのだが）まず、自分は追放者の身であって結婚はまだ喜ばしくはない、しかしこの不幸の慰めではある、と言う（2.189-197）。この言葉は、籤引きの取決めによって一年だけ王座を離れている者の心情とは考えにくい。むしろ、祖国から永遠に遠ざけられている者の悲嘆を表現しているように思われる<sup>9)</sup>。

これは、エウリーピデースの『ポイニッサイ』におけるポリュネイケースの、追放の身のつらさと共通する。したがって、先行作品に通じた読者であれば、『テーバイス』のこの箇所を読むときに、『ポイニッサイ』のポリュネイケースを自然に想起することになるであろう。そして、「ポリュネイケースはエテオクレースによって不当にもテーバイから追放されたのだ」という錯覚を覚えるであろう。

だからこそ、すぐ次でアドラーストスが「祖国の王権に復帰するように援助することを約束する」（199-200）と書かれていても、違和感を覚えないのである。この時点（上述したとおりアルゴス到着の翌朝）ではまだ支配権交替の時が回ってきていないのであれば、彼らの計画していることは王位篡奪になる。しかし、アドラーストス王は、そのような犯罪行為を自分から言い出すような人物ではない<sup>10)</sup>。

またテーバイにおいても、エテオクレースの方ではすでにポリュネイケースを永久に王位からもテーバイからも締め出すことを決意している、ということはすでに語られている（このことをポリュネイケースたちはまだ知らないはずである）<sup>11)</sup>。そのために、実際にポリュネイケースは祖国から不当にも追放されてしまったのだ、という錯覚を読者に与えることになるのである。

アルゴスで華燭の典が執り行なわれる（2.213-305）。それが終わると

ポリュネイケースは、「彼の王権」を求めることに思いを馳せる(2.306-308)。ここでは、テーバイはすでにポリュネイケースのものであるかのように描かれている。

しかしこの時点で、籤引きの日から一年が経過しているかどうかは不明である。これより後のテキストから判断すると、すでに一年が過ぎているとしか考えられないのだが、テキストの進行に従って読み進めていった場合には、ここでは今がいつなのかはわからないのである。

さらに、彼はテーバイから離れた「かの日」を、怒りと悲しみを伴って回想する(2.309-332)。この日は、合意の上の籤引きの結果、テーバイを一年間の予定で離れる時のことだったはずである。したがって、不当に権利を剥奪されたわけでもなければ、永久に追放されたわけでもない。それなのに、彼の回想シーンの中で語られる、彼自身の怒りの感情や彼を見送る妹アンティゴネーの悲しみは、一年後にはもとの状態が回復されて癒されるようなものには思われない<sup>12)</sup>。やはりここでの「祖国との離別」は、恒久的なものとして描かれている、と考えるべきである。従ってここでは、1.166で描写されている「その日」(ポリュネイケースが籤引きの結果、一年間だけテーバイを離れることが決まった日)とは矛盾が生じていることになる。

さらにポリュネイケースは妻となったアルギアアに対し、「この世に正義があれば、自分は祖国に凱旋できる」という趣旨のことを言う(2.356-362)。この夫婦の会話は、王位篡奪に関する協議とは思えない。正義の回復としての帰還を望んでいるのである。ここでもやはりポリュネイケースは「不当に」故国の王権から遠ざけられている者として描写されている。

続いてポリュネイケースは、義父アドラーストスおよび義兄弟となったテューデウスと共に相談し、まず「兄弟の信義をためし、懇願によって、王権を得ることを試みること」がよい、という結論に達する(2.367-370)。これはもはや「期限が来ていないにもかかわらず、不当にも、王位を要求する者」のすることではない。明らかに、『ポイニッサイ』における「被害者としてのポリュネイケース」が連想されるようになっている。

場面は、使節となったテューデウスに従って、テーバイへと移動す

る。ここでエテオクレースが「法も、王権の期限も超えて、暴君として支配している」姿がみとめられる(2.384-388)。ここでは、すでに一年の期限を超過していることが明らかである。

この場面は『ポイニッサイ』における、エテオクレースとポリュネイケースの会談の場面(母親イオカステーを仲介とする、兄弟の話し合いによる平和的解決の試み)が想起されるようになっている。しかし、『テバイス』では、ポリュネイケースの代理であるテューデウスは、『ポイニッサイ』のポリュネイケースよりも攻撃的な態度を取る。一応は「取決め通り、一年間ポリュネイケースがテバイスを支配したら、その後エテオクレースに再び王位を返す」とは言っているのだが、その言い方が、「一年後に王位を返してもらいたかったら、卑屈に追放の身になることだ」という趣旨の「忠告」である(2.408-410)。これは「嘆願」などではなく「脅迫」である。

また、実際にはまだアルゴスは戦争の準備も始めていないにもかかわらず、エテオクレースは夢のお告げのために、「必ず攻めてくる」とすでに信じこんでいる(そして実際にそのとおりになることを読者も承知している)。それに加えてこのテューデウスの威嚇的な態度のために、すでにアルゴス軍が攻め寄せてきており、自分は武力で脅されている、と感じているようにも思われる<sup>13)</sup>。『ポイニッサイ』を想起する読者も、この会談の時点ですでに城外にアルゴス勢がひしめいているかのような錯覚に陥る可能性は十分にあるであろう。

話し合いは決裂する。互いに互いの態度に怒り、エテオクレースは王権を返すつもりの無いことを明言し(2.428-429)、テューデウスは武力で奪い返すことを宣言する(2.456-457)。こうして兄弟間の取決めは破られる。(実際に戦端が開かれるまでにはまだまだ紆余曲折があるのだが、兄弟間の加害者・被害者関係という点では、ここまでで問題は出尽くしたと考えてよいだろう。)

このように、最終的には『ポイニッサイ』同様、エテオクレースの方が取決めを破って、王位をポリュネイケースに渡さなかった、ということになり、加害者は(一見すると)エテオクレースの側であるように思える。しかし、この「加害」が具体的にはどのように行なわれたかについては説明がほとんど無い。わずかに、ラーイオスの亡霊のお告げを聞

いて「戦闘の準備をする (2.133)」と一行で述べられているにすぎない。はたして彼が、おおっぴらに独裁を宣言したのか、ましてポリュネイケースがそれを知ったのかどうか (知ったとしたらいつ知ったのか)、については何の言及もない。

さらに重要なことは、エテオクレース自身はあくまでも自分は被害者の立場だと考えている、ということである。彼の方ではあくまでも、取決めを先に破ったのは、ポリュネイケースの方であって、自分ではない、という意識を持っている。だがこの「夢のお告げ」が事実であったかどうかは、テキストの中では書かれておらず、確認できない。「アルゴス王との縁組」はたしかに事実であった。が、ポリュネイケースがエテオクレースよりも先に (または一年間が過ぎるよりも前に) 王権を奪取しようとしたとは、どこにも書かれていないのである。したがって、エテオクレースの「被害者意識」の根拠は不明のままである。

一方、ポリュネイケースの方もやはり「被害者」として描かれている。しかし、どのような被害にあっているのかという点では、場面によってずれが生じている。初めは「一年交替」の合意の上で一時的に祖国を離れる、ということになっていたポリュネイケースは、アルゴスに到着した時点では、不当に「追放」されたことになってしまうのである。

つまり我々は、先行作品の中ですでに、「自発的にテーバイを離れるポリュネイケース」という像と、「力ずくでテーバイを追い出されたポリュネイケース」という像とを持っている。そのために『テーバイス』を読む場合にも、ポリュネイケースがテーバイを離れる場面の描写では「自発的に離れる」方が想起される。しかも、過去の作品における「自発的に離れるポリュネイケース」たちが、ことごとく、エテオクレースの裏切りにあったことを我々は知っている。一方、アルゴスに着いてからの場面では、ポリュネイケースは、すでに不当に追放されたかのような描写をされている。この描写によって、まず、エテオクレースの裏切りがすでに行なわれた、という時間的な錯覚を起こさせる。さらに、(この作品の中での) ラーイオスの亡霊の言葉とそれに対するエテオクレースの反応というエピソードと、(他の作品の)「力ずくで追い出されたポリュネイケース」を想起することで、この錯覚は補強される。このようにして、はじめは「不本意ながら」テーバイを離れたポリュネイケースは、いつのまにか、明確な加害者もないままに、「不当にも」祖国を



追放された不幸な被害者にすり変わってしまっているのである。

先行作品を想起することは、スターティウスの作品を読む場合には、必須の教養として読者に求められている。しかし、この場合には、場面ごとに異なる先行作品が想起され、しかもそれらが互いに両立不可能なものとなってしまっている。つまり、兄弟の双方が「被害者」になってしまい、「加害者」として描かれない、という状況が起こってしまっているのである。

#### Ⅳ スターティウスの『テーバイス』の特徴

以上のように、ギリシャ悲劇の諸作品と比較することで明らかになったことだが、『テーバイス』には被害者がいるのみで、明確な加害者が存在していない。これはすなわち「先に争いを起こした者」が存在していない、ということである。つまり「兄弟同士の争いの発端」に関して、先行作品と比較することによって、「不明な所が明らかになる」のではなく「不明であることが明らかになる」という結果になったのである。

しかし逆に言うとスターティウスは、矛盾や不明点にもかかわらず、これらの要素を先行作品の中から選び出して用いているということでもある。こう考えると、『テーバイス』の特徴がどのようなものであるかについては言うことができるだろう。それは、次のようなものである。

まず第一に、悪意に満ちている、ということである。そもそも、一番初めの「兄弟の内どちらか一方がテーバイを離れる」という取決めも、お互いの存在が我慢できなかったためである。他の先行作品では、この取決めは全て、兄弟が互いに殺し合うという破滅を避けるための手段であったことを考えると、彼らの憎悪と悪意がいかに深いものであるかがわかるだろう。また、「祖国を守るエテオクレース」という像は消え失せ、同時に、「呪いの成就を避けるために、自発的に祖国と王権から遠ざかるポリュネイケース」もいなくなる。彼らはどちらも、自分の欲望のためにだけ行動し、祖国に対する義務も兄弟に対する情愛も消え失せている。

第二点は、一見は、第一と矛盾するように思われることであるが、明確な加害者が存在しない、ということである。つまり、兄弟のどちらの

側も、自発的な意志をもって自らの欲するものを奪い取ろうとしているのではない。「自分だけが権力の頂点に立ちたい」という欲望を持っていながら、それを自分の方から積極的に取得しようとはしていない。まず一年交替で支配することを取決め、その順番も籤引きで決める。なんとも消極的で陰險なやり口である。

第三に、(加害者が存在しないにもかかわらず、)被害者意識は非常に強い。悪意と権力欲に満ちていながら、彼らの行動は、恐怖感が動機として強く作用している。兄弟は、互いに、相手に自分の権利を奪われると思ひ込み、恐慌にかられて攻撃に転じるのである。しかもこの恐怖は、(実際にはどちらが先に行動を起こしたのか、時間関係が曖昧であるために)単なる被害妄想や猜疑心とは片付けられない。部分的には彼らの恐怖は事実に基づいている。しかし、根本的な点に関しては明確な加害者が存在していないために、彼らの恐怖は、実体を伴わない。このような恐怖は、ギリシャ悲劇の中には存在していない。スターティウスの作品にだけ見られる特色である。

祖国に対する責任感も無く、独裁者の地位を渴望し、さりとて自分から奪い取ろうという意志は持たない。肉親への情愛も無く、悪意に満ち、実際には存在していない「加害者」の攻撃に怯えて、凶暴な態度に転じる。この怯懦で殺伐として陰惨な世界が、『テーバイス』の特色なのである。

## 注

### I 章

- 1) ホメロスでは『オデュッセイアー』11.271-280, ピンダロスでは『オリュンピア』2.38-45, 6.15-16, 『ネメア』9.16-27に言及がある。
- 2) Parsons, P. J., "The Lille 'Stesichoros'", *ZPE* 26 (1977), 7-36.
- 3) Vessey, D., "Statius and Antimachus: A Review of the Evidence," *Philologus* 114 (1970), 118-43.
- 4) Ogilvie, R. M., *Roman Literature and Society*, (Reprinted 1991) p. 233を参照。
- 5) ポリュネイケースをはじめとして、テューデウス, カパネウス, アムピアラーオス, パルテノパイオスの五人は不動のメンバーだが、残りの二人は作品によって異なる。特に大きな相違としては、アルゴス王アド

ラーストスが七将に数えられるかどうかの違いがある。

- 6) 悲劇、特にアイスキュロスの『七将』では七つの門で同時に七人の戦士の戦いが行なわれる。これに対して叙事詩である『テーバイス』では、戦士たちは順に一人ずつ死んでいく。そのため、七つの門の名前が明記されるということはない。
- 7) ソポクレースとセネカの『オイディプース王』は、まとまった作品ではあるが、兄弟の父オイディプースの悲劇のみを主題としており、息子たちの争いについては言及されていないため、ここでは扱わない。

## II 章

- 1) コロスは778-790で、この兄弟の殺し合いをオイディプースの呪いであると歌っている。しかし、それがどのような経緯で具体化したのかという説明は行なっていない。またエテオクレースは、使者の報告を通じてポリュネイケースの主張を聞いても、「生まれた時から正義には縁の無い男」という人格攻撃を行なうのみで、相手の非を論理的に反駁するということとはしていない(653-676)。したがって、ポリュネイケースが何故テーバイに攻めてきたのか、その理由は不明のままである。
- 2) 特に、エテオクレースの「祖国の守護者」としての言明は194-5、ポリュネイケースの「祖国の敵」については199-202。
- 3) 518-519の二人の問答がこのことを端的に表している。
- 4) ポリュネイケースがテーバイを離れたのは自発的な行為であったことは、151に明記されている。

ここでの状況の説明は極めて簡略であり、神話の予備知識なしには理解しにくい表現となっている。しかし、前提とされているのがどのような神話であるかは、他のギリシャ悲劇作品や断片などから推測するしかない。

まずオイディプースが息子たちに対して「兄弟同士、武器を取って争え」と呪ったという話は、ギリシャ悲劇の諸作品に共通している上、ステシコロス作と推測されるパピルス（I章の注2を参照）や叙事詩圈『テーバイス』（スターティウスの『テーバイス』とは別物）にもあり、古くからよく知られた神話であったと思われる。

ただし、この争いの結果どうなるのか（普通の争いであれば、一方が勝ち他方が負けて終わるはずである）については、作品によって違いがある。『七将』『ポイニッサイ』では単に「争え」というのみで勝敗の行方は特定されていないのに対し、ステシコロス、叙事詩圈『テーバイ

ス』断片3 Kおよび『コロノスのオイディプース』(1372-4)では、兄弟は互いの手で殺し合えとはっきり宣告されている。

さらに、何を巡っての争いかという対象についても差がある。オイディプース自身の言葉の中でこの対象が明記されているのは、叙事詩圈『テーバイス』断片2 Kと『七将』『ポイニッサイ』であるが、断片2 Kでは「πατρώια (父親のもの)」、『七将』では「κτῆματα (財産)」(790)、『ポイニッサイ』では「δῶμα (家)」(68)となっている。さらに、ストーリーの展開から「王位」が争われているとわかるのは、『ポイニッサイ』『コロノス』だけである。したがってこの二作品以外の作品では、兄弟の争いは、国家の指導者の地位を巡るものではなく、オイディプース個人の遺産相続の係争にすぎなかったという可能性もある。

以上のように考えると、この『ヒケティデス』におけるポリュネイケースが求めているものは、「王権」ではなくて「自分の財産を取り戻すこと」であったかもしれない。この可能性は、『七将』『アンティゴネー』など(『ポイニッサイ』『コロノス』のように「王権」が争いの焦点であることが明記されていない作品)にもあてはまる。

- 5) さらに473-480でも、ポリュネイケース自身の口からも同様のことが語られている。ポリュネイケースが年少でありしかも自発的にテーバイを離れたことは、71-72で明らかにされている。ポリュネイケース自身も476でこれが自発的であったことを強調している。
- 6) ポリュネイケースが年長であることは1294に、エテオクレースが年少であることは1295にそれぞれ明記されている。さらに374-5のイスメネーの言葉からもこの年齢関係は確認できる。
- 7) このことは、1354-55のオイディプースの言葉からも明らかである。

### Ⅲ章

- 1) この「発端」にあたる部分の表現は、具体性に乏しいものとなっている。兄弟の間に引き起こされた憎悪がどのようなものかとか、詩人自身の詠嘆であるとかが大部分を占めており、実際にどのような取決めが行なわれ、どちらがどうなったのか、という具体的な経緯についてはわずかに、138-141と164-165「籤運に見放され、ポリュネイケースの支配が後に回された。」があるのみである。それも、高度に省略された表現であるから、読者の神話の知識を前提としているのではないと思われる。

スターティウスの文体の特徴を知る参考のために、1.123-143の訳を以下に挙げておく(訳は筆者による)。

そしてカドモスの裔 [テーバイ] の屋根に復讐の女神がまっしぐら  
に舞い降りて  
いつもの雲で館に汚れをもたらすや否や、  
ただちに兄弟たちの胸の内に動揺がかきたてられ、  
一族ゆかりの狂気が心に忍び込んだ。さらに、幸せな者たちに対する  
妬みという病い、また、憎しみを生み出す恐怖、そして支配権を  
激しく恋焦がれる気持ちや、順位が崩れて次席の権利が回ってくるのを  
待ち切れない野心、そして何より甘美な、至高の地位にただ一人立つ  
という欲望、  
王国を分かち合うことにはつきものの不和が、二人の心に忍び込む。  
あたかも、気性の荒い家畜の中から選び出された若牛を、  
農夫が無理やり鋤に繋ぎとめると、  
牛の方は、まだ使役に慣れておらず  
誇り高い頭をごつごつした脇腹まで下げられたことがないために怒り、  
それぞれ別の方へ引<sup>あせりや</sup>張って、等しい力で結び目を緩め、  
あちらこちらへと畔溝を散らばしてしまう。  
そのように、抑えのきかない兄弟たちを、不和が激しく  
駆り立てる。取決めによって、一年ごとに交替に  
支配権を交換し、一方が国を離れることが決められた。この悪意ある  
取決めによって、  
互いの幸運が入れ替わるようになっている。すなわち、王笏を持つ者を  
つねに次の後継者が、差し迫った期限で悩ますようにと。  
これが、兄弟の間にあった信義であった。これだけが戦いを遅らせて  
いた。

だが、次の王位までは続くまい。

- 2) これはステーシコロスの断片でも同様である。
- 3) この比喩の中では、二頭の牛は同等の力で鋤を引っ張る、と書かれて  
いる (1.135-6)。

なお、年功序列ではなく籤引きできめるというやり方に関しては、ス  
テーシコロスの作と思われる断片の中にも存在している。ただしこの場  
合には、一年交替の支配というはなはだ不安定な状態になるのではなく、  
恒久的な遺産の分割を前提としており、籤引きの結果、一方はテーバイ  
で家督を継ぎ、もう一方は財産を得る、という取決めになっている。し  
たがって、祖国を追われる側も、そう貧乏籤ではなかったということに  
なる。

4) 例えば『イーリアス』2巻1行以下。

5) 1.312-314

Interea patriis olim uagus exsul ab oris

Oedipodionides furto deserta pererrat.

Aoniae.

この interea (その間) 及び olim (長いこと) を字義通り解釈して問題がなければ、ユピテルの決定がなされたのは、ポリュネイケースがテーパーバイを離れてからしばらく時間が経ってから、しかもアルゴスに到着する以前、ということになる (しかし、interea, olim などの副詞が、厳密な時間関係を表すとは限らないであろう。単に場面転換を表している、という可能性も十分ある)。

6) しかし、317-319の「兄弟 [エテオクレース] を玉座からひきずり降ろして、自分がテーパーバイの権力を得る日を見られるならば、その日と命とを引き換えにしてもかまわない。」という表現は、「一年交替の取決め」が守られていると考えると、大袈裟で適切さに欠ける。なにも命を引き換えにしなくても、あと一年もしないうちに自動的に王位は彼のものとなるはずだったのだから。

7) のちにテューデウスとの談判が決裂した際にもエテオクレースは、使者であるテューデウスに闇討ちをかけるような卑劣な行為に及ぶ。この明らかな背信行為 (使者は不可侵の存在であるべきなので) は、単に彼の怒りや邪悪さから生じたのではなく、不安や恐怖から出た行動として描かれている (2.482-495)。したがって、『ポイニッサイ』のエテオクレースと比較すると、強欲で恥知らずである点では共通するものの、『テーパーバイス』のエテオクレースは、さらに卑怯で臆病であり、いわば、「独裁者の孤独と不安」といったものが表現されているように思われる。これは、ギリシャ悲劇のエテオクレースには無かった特徴と言える。

8) これが、アルゴス到着の翌朝であることは、2.134-145からも明らかである。まず134-140までが朝の描写であり、さらに、143-145では「彼ら (ポリュネイケースとテューデウス) は、諍いと嵐をくぐり抜けて後、疲れ切って、なみなみと角に溢れる「眠り」を注ぎ込まれていた。」とある (ポリュネイケースとテューデウスは、嵐の中アルゴスに到着した途端に、野宿の場所を争って殴り合いの喧嘩を演じているのである)。

9) 2.195-7からも、自分が本来の運命から切り離されている、というニュアンスが感じられる。

10) アドラーストスはしばしば mitis (柔和な、温和な) という形容詞を冠

せられている。また、対テーバイ戦が不可避の状況になってもなお躊躇する様子を見せる。

- 11) すでに論じたように、エテオクレースのもとにラーイオスの亡霊が訪れたのは、ポリュネイケースがアルゴスに到着したのと同じ晩である。その翌朝にアルゴスまで情報が流れるとは考えにくい。
- 12) 「人間の心痛にとって何よりも重い『望み』(2.320-321)」などという表現からも、ここでは一年やそこらで再会できる望みのある別離ではないことは明らかである。
- 13) 2.418-420でエテオクレースは、テューデウスの態度を「城塞を掘り崩す工兵」や「戦闘ラッパ」にたとえている。